

ジュリアン・コーベットの研究序説

——海洋戦略思想家の生涯と業績——

山崎 元泰

An Introduction to the Maritime Strategy of Julian Corbett:

His Life and Scholarly Achievements

YAMAZAKI, Motoyasu

Abstract

Julian Corbett is one of the greatest British naval historians and maritime strategists. Having received no post-graduate degree in historical or strategic studies, he was highly regarded as a leading expert on naval issues. Without any experience of serving in the armed forces, he deeply engaged in the education of the Royal Navy and also worked as an adviser to the top leadership of the Admiralty.

After Corbett passed away in 1922, however, he came to be all but forgotten among naval historians and strategists in the UK as well as abroad. Despite high reputations during his lifetime, Corbett's strategic works have long been under-studied and under-evaluated.

In order to deepen our understanding of Corbett's maritime strategy, this article reviews his life and scholarly achievements, thereby stimulating further research on the contemporary significance of his strategic thought.

要 約

ジュリアン・コーベットは主に20世紀初頭に活躍した英国を代表する海軍史家であり、かつ海洋戦略思想家である。彼はもともと法律家出身で軍務経験がなく、歴史や戦略に関する専門教育も受けていなかった。しかしながらコーベットは海軍問題に関する専門家として高く評価され、学術上の著作を数多く生み出すばかりでなく、海軍教育の分野でも多大な貢献をした。さらに彼は海軍省の実質的な顧問のような役割を果たし、晩年には日露戦争と第一次世界大戦における海戦を扱った公式戦史まで執筆

している。

このように生前は研究者として非常に大きな成功を収めていたコーベットであるが、死後、彼の存在は研究成果とともに急速に忘れ去られてしまう。第二次世界大戦後になって海外では次第に、コーベットの海洋戦略に対する再評価が進むようにはなったが、依然として十分ではない。同様に日本国内でも、近年コーベットが少しずつ取り上げられるようにはなっているものの、海軍戦略の権威はあくまで米国のマハンである。コーベットに関する言及が、ほとんどない戦略概説書もいまだ珍しくはない。

本稿はコーベットの生涯と業績を概観することで、彼の海洋戦略思想に対する理解を促進し、わが国におけるコーベット研究のさらなる発展へとつなげていくことを意図したものである。

キーワード

ジュリアン・コーベット (Julian Corbett)

海洋戦略 (Maritime Strategy)

海軍史 (Naval History)

英海軍 (Royal Navy)

目次

はじめに

1. 生い立ちと長いモラトリアム期
2. 遅れてきた海軍史家
3. 海洋戦略思想家の誕生
4. 公式戦史の執筆

おわりに

はじめに

ジュリアン・S・コーベット (Julian Stafford Corbett: 1854-1922)⁽¹⁾ は英国が生んだ

偉大な海軍史の研究者であり、また海洋戦略の思想家である。彼が活躍したのは19世紀末から20世紀初頭にかけての時期であり、その間、学者として多くの優れた著作を生み出したばかりでなく、英海軍における教育活動や

(1) 'Corbett' の姓は「コルベット」とも「コーベット」とも表記される。旧日本海軍時代には「コルベット」と呼ばれていたようであるが、近年ではより原語の発音に近い「コーベット」が主として使われる傾向にある。ただ依然として、「コルベット」との伝統的表記もみられ、このように訳語が定まっていないこと自体、日本における「コルベット／コーベット」研究が、まだ十分でないことを物語っている。

いずれにせよ、本論文では「コーベット」を使用することにした。発音の点にくわえて、彼の戦略研究上の名著『海洋戦略の諸原則 (Some Principles of Maritime Strategy)』の翻訳書において、「コーベット」の著者名が使用されていることがその主な理由である。

なお、「フリゲート艦」よりひと回り小さい船を「コルベット艦 (Corvette)」と呼ぶことがあるが、「Corbett」とはスペルがそもそも違い、ジュリアン・コーベットとは無関係である。ちなみにこの「コルベット艦」も、より正しい発音では「コーベット艦」もしくは「コーヴェット艦」となる。

政策立案においても重要な役割を果たした。

たとえばチャーチルは1923年に出版した回顧録のなかで、自身が海軍大臣に就任した頃を振り返り、以下のように述べている。

私が海軍省に赴いたとき、海軍士官がそのキャリアや訓練のなかで海戦についての本をたった1冊でも読んだり、海軍史に関するごく初歩的な試験に通ったりする必要さえ、まったくなかった。英海軍は、なんら海軍研究に重要な貢献をしてこなかったのである。海上権力に関する定評ある著作は、米国の提督〔原注：マハン提督〕によって執筆されている。英国の海上戦闘と海軍戦略についての最善の説明は、イギリス人の文民〔原注：ジュリアン・コーベットの脚〕によってまとめられたものだった⁽²⁾。

言うまでもなく、アルフレッド・T・マハン (Alfred Thayer Mahan: 1840-1914) は海軍戦略の世界的な第一人者で、コーベットとほぼ同時代人であった。当時チャーチルにとって、この両者は並び称すべき存在だったわけである。

しかしマハンとは対照的に、コーベットの

名声は没後、急速にしぼんでしまう。生前の高い評価とは裏腹に、以後、数十年にわたってほぼ忘れられた存在となる。

コーベットの業績や戦略思想が再評価されるようになるのは、第二次世界大戦後になってからのことで、それも年月をかけて少しずつ進んだというのが実態である。しかも当初はイギリス本国よりも、むしろアメリカやカナダなどの研究者を中心に、コーベットが取り上げられていた。

それでも近年では、コーベットの海洋戦略を評価する声が、かつてよりも着実に高まっている。たとえばオックスフォード大学教授 (当時) で、安全保障や戦史研究の世界的権威であるロバート・オニール (Robert O'Neill) は、「海洋戦略についての著作がある者のなかで、コーベットは他の誰よりも説得力のある分析をしている」⁽³⁾と明快に述べている。

あるいはかつてマハンが校長を務めていた米海軍大学校のジェームズ・ホルムズ (James Holmes) 准教授 (現在は教授) は、もはやマハンに代わりコーベットの時代が到来したかもしれない、とさえ示唆している⁽⁴⁾。

こうしてかつての名声と権威を取り戻したかのように見えるコーベットであるが、では本当に復活したのかというと、実際のところ

(2) Winston Churchill, *World Crisis*, (Toronto: Macmillan Co. of Canada, 1923), p. 93. マハンと並べてコーベットを高く評価したチャーチルのこの言葉は、ピーター・スタンフォード「ドレッドノート時代におけるジュリアン・コーベットの業績」平野龍二訳『海軍戦略研究』第3巻第1号増刊 (2013年9月) 73頁 [Peter Marsh Stanford, 'The Work of Sir Julian Corbett in the Dreadnought Era', *U.S. Naval Institute Proceedings*, vol. 77, no. 1 (January 1951), p. 69] で紹介されて以来、コーベットに関する研究論文のなかでたびたび引用されてきた。ただスタンフォード論文において、この部分に引用注はなく、出展が不明であった。したがって多くの論文で、いわば孫引用の形で処理されてきたが、これは上記のようにチャーチルの回顧録『世界の危機』のなかの言葉である。

なおこの部分を訳すにあたって、平野の訳を参考にしつつ、筆者自身が翻訳を行った。以下、本論文においては、既存の訳がある場合も、訳語や口調などを適宜変更している場合があることに注意されたい。

(3) Robert O'Neill, 'Foreword', in John B. Hattendorf and Robert S. Jordan (eds.), *Maritime Strategy and the Balance of Power: Britain and America in the Twentieth Century*, (New York: Palgrave Macmillan, 1989), p. xxi.

(4) James R. Holmes, 'From Mahan to Corbett?', *The Diplomat*, (11 December 2011). 本論文を紹介・解説したものとして、関根大助「解題『マハンからコーベットへ?』」『海洋安全保障情報特報』(2012年5月24日)がある。

そうとまでは考えられない。海軍戦略の分野で権威として君臨し続けるのは、あくまでマハンの方である。コーベットのマハンという巨人の陰に隠れ、彼を評価し取り上げるのは、依然として一部の研究者にとどまっている。

ただし注意すべきは、大多数の専門家がコーベットを低く評価し、論じる価値がないと考えているわけではないことである。単にあまり知られていないというのが実態であろう。事実、前述のオニールは、コーベットの海洋戦略を評価するコメントに続けて、彼が不当に無名な存在であり続けたことを憂い、「蘇生」する必要性を説いている⁽⁵⁾。

このような状況は、おおむね日本でも変わりはない。海軍戦略の大家として登場するのは、圧倒的にマハンである。コーベットの業績も徐々に紹介されつつあるのは事実であるが、限られた専門家⁽⁶⁾の間で繰り返し取り上げられるばかりで、あまり広がりを見せてはいない。

筆者は、コーベットの海洋戦略思想が単なる歴史研究の対象ではなく、現代的な意義と価値を有していると信じている。中国がマハンのとでもいうべき「海洋強国」の建設に突き進んでいるなか、これと対峙する日本にとって、コーベットはとりわけ学ぶべき点を多く含んでいるのではなかろうか。

実際のところ先ほど触れたホルムズは、トシ・ヨシハラ（米海軍大学校教授）との共著

論文において、中国の台頭という新しい安全保障環境に対し日本はコーベットこそを参考とし、独自の海洋戦略を編み出すべきと強く主張している⁽⁷⁾。

そこで本論文は、日本におけるコーベット理解のさらなる深化に向け、彼の生涯を振り返り、また主要な業績を紹介することにしたい。紙幅の関係もあり、残念ではあるが個々の著作の詳細な解説、そしてコーベットの海洋戦略自体の詳しい分析は、別の機会とする。今後のコーベット研究に対し、ある種の見取り図を提供するのが、序論たる本稿の主たる目的である。

なおコーベット自身は、艦長や指揮官として海戦で活躍したわけでも、あるいは海軍省高官として戦争指導に携わったわけでもない。はっきり言ってしまえば、一介の学者に過ぎなかった。

したがって日本において、コーベットの戦史研究や海洋戦略に関する紹介はそれなりに存在していても、彼がそもそもどういった人物であったのかという評伝的な側面については、ほとんど知られていないのが実情である⁽⁸⁾。このことはコーベットに対する理解や認知が、わが国でいまひとつ広まらない一因とも考えられる。

しかし実戦や実務でなく、研究面で歴史に名を遺した戦略家といえども、人物像や足跡を明らかにすることは、その思想を理解する

(5) Robert O'Neill, 'Foreword', p. xxi.

(6) 日本ではとりわけ海上自衛隊の関係者・元関係者が中心となって、コーベットや関連文献の翻訳・紹介が進んでいる。重要な例外として海洋安全保障研究家の関根大助氏がおり、たとえば次のような論文がある。関根大助「コーベットを知らずして海洋戦略思想を語るなかれ——マハンと異なるその戦略思想の特徴——」『波涛』第225号（2013年7月）31-40頁。

(7) Toshi Yoshihara and James R. Holmes, 'Japanese Maritime Thought: If Not Mahan, Who?', *Naval War College Review*, vol. 59, no. 3, (Summer 2006), pp. 23-51.

(8) 平野龍二「ジュリアン・コルベットの生涯とその著作——海軍史家としての再評価——」『波涛』第228号（2014年4月）29-46頁。この論文はタイトルが指し示すように、海軍史家としての側面に焦点を当てたものではあるが、コーベットの生涯を日本に紹介した貴重な研究である。

ためにも重要である。

たとえばクラウゼヴィッツはプロイセンの将校としてナポレオン戦争に従軍し、その経験をもとに戦争に関する哲学的考察を推し進め、『戦争論』を執筆した。しかし彼が意図した形での改訂を終える前に病死してしまったことで、その真意が長らく誤解される結果を招いてしまったことは、もはやクラウゼヴィッツ解釈における常識である。

あるいはリデル・ハートが若き士官として第一次世界大戦、とりわけその西部戦線で殲滅戦、消耗戦の愚かさを目の当たりにし、直接的アプローチを極端に忌避するようになったのは有名な話である。

コーベットの場合、当時の戦史家、戦略家としては珍しく軍務経験がまったくなく、さらに大学院に進学したわけでもないで博士号は持っておらず、正規の大学教授職には生涯ついていない。

したがってその彼がいかにして著名で影響力ある海軍史家となり、また海洋戦略について重要な業績を残すに至ったかを明らかにするのは、研究の背景や全体像を把握するにあたって大きな意味があるろう。

1. 生い立ちと長いモラトリアム期⁽⁹⁾

ジュリアン・コーベットは1854年11月12日、ロンドンで生まれた。父チャールズ(Charles)、母エリザベス(Elizabeth)の間に生まれた次男で、長男のチャールズ(父と同

名)とは1歳違い。ジュリアンにはさらに弟3人、妹1人がおり、計6人きょうだいであった。

父は建築家であり、1840年代後半にリンカンシャー(イングランド東部)からロンドンへと移り住み、1852年にはエリザベスと結婚している。チャールズは経済的に大きな成功を収めていたことから、コーベット家はきわめて裕福であった。そのためしばしば大英博物館に子供たちを連れて行ったり、鉄道を使って国内旅行をしたりなど、文化的な生活をおくる余裕があった。家計がいっそう豊かになった1861年以降は、大陸旅行にも出かけるようになっていく。

母エリザベスに関する記録はあまり残っておらず、その人物像はほとんど知られていないが、家族内では非常に大きな存在だったとのことである。実際、1892年に母親と死別するまで、ジュリアンは結婚をしなかった(父親の死去は1882年)。

土地開発で財を築いた父のおかげで、ジュリアンの弟たちはいずれもこれといった定職につかず、悠々自適な生活をおくっていた。ジュリアン自身もキャリアの方向性が定まるまで、かなり長い人生のモラトリアム期を過ごしている。

一方、長兄のチャールズは少し異なり、オックスフォード大学で歴史学を専攻後、結婚を経て、政治の世界に身を投じた。1895年、1900年の総選挙に出馬するも落選。しかし3度目の挑戦で、1906年ついに下院議員とな

(9) 本論文におけるコーベットの生涯と業績に関する説明は、以下の研究に大きく依拠していることをあらかじめ明記しておきたい。

Donald M. Schurman, *The Education of a Navy: The Development of British Naval Strategic Thought, 1867-1914*, (London: Cassell, 1965), Chapter 7, 'Civilian Historian: Sir Julian Corbett', pp. 147-184; Donald M. Schurman, *Julian S. Corbett, 1854-1922: Historian of British Maritime Policy from Drake to Jellicoe*, (London: Royal Historical Society, 1981); J. J. Widen, *Theorist of Maritime Strategy: Sir Julian Corbett and his Contribution to Military and Naval Thought*, (Surrey: Ashgate, 2012), Chapter 1, 'Life and Historical Works', pp. 15-28.

る。婦人参政権の実現に向け積極的に取り組んだが、1910年の総選挙で再び落選し、わずか1期で議席を失った。ただし地元での政治活動そのものは、その後も精力的に続けたようである。

コーベット⁽¹⁰⁾とはいうと、1873年、ケンブリッジ大学のトリニティ・カレッジ(Trinity College)⁽¹¹⁾に入学し、法学を専攻する。在学中は学業に励むのみならず、スポーツ、とりわけボート競技に熱中していたらしく、コックス(舵手)をつとめていた。後年、このころを振り返って、「私の人生でもっとも愉しかった時代」⁽¹²⁾と述べている。

ケンブリッジを非常に優秀な成績で卒業⁽¹³⁾したコーベットは、1877年に法廷弁護士(Barrister)⁽¹⁴⁾となる。ただし法曹界での仕事は「退屈」⁽¹⁵⁾で性に合わなかったようで、一応1882年まで仕事は続けたものの、法務に本腰を入れて取り組むことはなかった。

むしろこの間、コーベットの人格形成やその後のキャリアに大きな影響を与えたと考えられるのは、当時としては珍しかった海外への長期旅行であった。1877年、兄のチャールズとともに、まずインドへと旅立つ。現地には10月に到着し、翌年4月まで約半年滞在する。

さらに1879年には、北米も訪れている。兄チャールズにくわえ、今回は弟のハーバート(Herbert)、さらにコーベット家とは親しい隣人で、出版業を営むマクミラン家のモーリス(Maurice Macmillan)を伴った旅であった。一行は7月中旬に出発し、11月初めに帰国する。3か月強と比較的短めの滞在ながら、ボストン、ニューヨーク、ワシントン、フィラデルフィア、ナイアガラの滝、シカゴ、トロント、モントリオールなど、各所を意欲的に見て回っている。

これらの経験はコーベットのなかに、大英帝国への愛国心を育んだようである。あるいは途中の長い航海が、軍務歴のない彼に海への関心を植え付けた可能性もある。ただし彼が海軍史家となるのはもっとあとのことで、海外で見聞を広め異文化に接したことにより、インスピレーションでもわいたのであろうか、コーベットは小説の執筆に乗り出す。

コーベットはインド、北米のほかにもノルウェー、イタリアに毎年のように出かけ、ノルウェーでは劇作家ヘンリック・イブセンと、イタリアでは小説家マーク・トウェインと知遇を得ていたので、もしかしたら彼らの影響もあったのかもしれない。

(10) 以下、単に「コーベット」と呼称するときは、本論文の対象たるジュリアン・コーベットを指すものとする。

(11) トリニティはケンブリッジ大学のなかで、もっとも名門のカレッジである。ちなみにリデル・ハートは同じケンブリッジ大学でも、コープス・クリスティ・カレッジ(Corpus Christi College)で歴史学を専攻した。

(12) Donald Schurman, *Julian S. Corbett*, p. 6.

(13) 首席で卒業したとの説明を時折みかけることがあるが、これは英語の‘First Class’で卒業という言葉の意味を取り違えたものと想像される。これは日本風に言うなら、「トップクラスの成績で」といった意味で、必ずしも首席であるとは限らない。

(14) 英国の弁護士資格には、法廷弁護士と事務弁護士(Solicitor)の2種類がある。

(15) Donald Schurman, *The Education of a Navy*, p. 148. アンドリュー・ランバート「戦略家のための歴史——ジュリアン・コーベット、海軍士官教育、そして国家戦略」矢吹啓訳『戦略研究』第8号(2010年7月)58頁。

(16) 以下の4作品である。

Julian Corbett, *The Fall of Asgard: A Tale of St Olaf's Days*, (London: Macmillan, 1886); Julian Corbett, *For God and Gold*, (London: Macmillan, 1887); Julian Corbett, *Kophetua the Thirteenth*, (London: Macmillan, 1889); Julian Corbett, *A Business in Great Waters*, (London: Methuen, 1895).

いずれにせよ10年ほどの間に、コーベットの計4作の小説を出版する⁽¹⁶⁾。最初の3作はマクミラン社から、最後のものはメッシュエン社であった。トウエインがアメリカで作品のプロモーションを後押ししてくれたこともあったらしいが、結果的にこれらの小説はどれひとつとして成功しなかった。

軍事戦略を研究する後世の人間からすれば幸いだったことに、コーベットが小説家として生涯をおくることは、彼自身がそれを望んでいたかどうかはさておき、実現しなかったのである。

ただしこの小説執筆は、人生の転機となる。その意味でもっとも重要な作品は、1887年出版の『神と黄金のために (For God and Gold)』と広く考えられている。エリザベス朝時代を舞台とした海洋冒険小説で、作品自体はあくまでフィクションであるが、ここに実在のフランシス・ドレーク (Francis Drake) が登場する。ドレークは私掠船しりゃくせんの船長にして海軍提督であり、スペインの無敵艦隊を撃破したイギリスの英雄である。

コーベットは小説執筆のため史料調査をすすめ、歴史研究に強い関心を抱くようになる。その結果、ドレークに関する文献には、誤りがしばしば含まれることを発見した。このことは後年、より学術的な海軍史研究へと彼を導くことになる。

また、おそらくはこの作品とのつながりからと思われるが、マクミラン社から『活躍したイギリス人 (English Men of Action)』シリーズのため、ジョージ・マンク (George

Monck) に関する短めの伝記を執筆してほしいとの依頼を受ける。マンクは第一次英蘭戦争で獅子奮迅の働きをした海軍司令官である。

この仕事を引き受けたコーベットは、一般向けで非常に読みやすい『マンク (Monk)』⁽¹⁷⁾を1889年に出版する。コーベットとしては初のノンフィクション作品であったが、それまでに書いた本のなかで、これがもっとも大きな成功を収める。この伝記はいまでも読む価値があると評価されている⁽¹⁸⁾。

こうして立て続けに1890年、同じシリーズのため『フランシス・ドレーク卿 (Sir Francis Drake)』⁽¹⁹⁾を出版する。この本は非常によく売れ、前作を上回る成功となった。英米両国で版を重ね、ロングセラーとなったこのドレーク伝は、彼の生涯に関する最良の著作であるとの後世の評もある⁽²⁰⁾。

1895年、コーベットは再びフィクションの世界に戻り、歴史小説を出版する。小説としては4作目であったが、またしても失敗に終わり、これが最後のものとなる。こうしてコーベットの海軍史家への道は事実上決定づけられた。

2. 遅れてきた海軍史家

1896年、コーベットは著名な海軍史家でロンドン大学キングス・カレッジ (King's College London) 教授のジョン・ノックス・ロートン (John Knox Laughton) から、英西戦争関係の海軍史料を編纂し、海軍記録協会 (Navy Records Society) を通じて出版するよ

(17) Julian Corbett, *Monk*, (London and New York: Macmillan, 1889).

マンクは Monck とも Monk とも表記される。前者の方が一般的だが、コーベットは後者のスペルを使用している。

(18) Donald Schurman, *Julian S. Corbett*, p. 18.

(19) Julian Corbett, *Sir Francis Drake*, (London: Macmillan, 1890).

(20) ピーター・スタンフォード「ドレッドノート時代におけるジュリアン・コーベットの業績」62頁。

う依頼を受ける。この協会はロートンが、シプリアン・ブリッジ (Cyprian Bridge) 提督とともに1893年に設立したもので、コーベットは早くから加入していた。またマハンも創設当初からの海外会員であった。

コーベットは初代事務局長を務めていたロートンと知己になり、上記の依頼を受けたのである。ロートンは海軍史を独自の学問領域として確立した先駆者と広く考えられており、コーベットのみならずマハンにも大きな影響を与えたとされる⁽²¹⁾。

コーベットはこの編集作業のかたわら、ドレークに関する研究と執筆もすすみ、1898年、ついに『ドレークとチューダー朝の海軍 (Drake and the Tudor Navy)』⁽²²⁾ を出版する。彼にとっては最初の学術的著作であり、全2巻の大部なものであったが、綿密な史料調査に基づくものと非常に高く評価された。こうしてコーベットは、第一級の海軍史家として認められるようになったのである。

同書の執筆にあたっては、ロートンの強い勧めがあったとされる。さらに当時交際中で1899年には正式に結婚することになる、いとこのイーディス (Edith) も歴史研究に携わるよう後押しをしたとのことである。40代にしてようやくコーベットは、自分の歩むべき道を定めたことになる。

『ドレークとチューダー朝の海軍』が世に出た1898年には、依頼されていた英西戦争の史料集⁽²³⁾ の方も刊行され、さらに1900年に

は続編ともいべき『ドレークの後継者たち (The Successors of Drake)』⁽²⁴⁾ が出版される。

ドレークおよびその後継者らの研究を通じて、コーベットが明らかにしたのは、海洋力 (Maritime Power) の限界についてである。当時、強力な海軍さえあれば、陸軍の必要性は低いと考える海軍および艦隊偏重主義者の一派が存在していた。

コーベットは綿密な史料調査に基づき、陸軍の協力なくして海軍が本来の力を発揮することはできず、海洋力だけで国家戦略が達成できるわけではないことを論証する。すなわち、両方の軍種が密接に協働することこそが不可欠と説いたわけである。この点はのちの彼の戦略研究でも、中核的な思想のひとつとなっていく。

また外交的考慮を優先させ、純軍事的観点からは疑問の残る決定をしばしば下したエリザベス女王に対し、かなり批判的な態度をとっていたことも、この時期のコーベットの特徴である。彼はドレークを卓越した海軍戦略家として称揚していたことから、政治指導者としてのエリザベス女王批判はその裏返しであろう。

ただしこのような態度は『ドレークの後継者たち』において少し弱まり、後年、政治を軍事の上位に置くクラウゼヴィッツの思想に触れることで、完全に修正されてしまう。

1902年にコーベットは英海軍大学校 (Royal Naval College) の戦争課程 (War Course)⁽²⁵⁾

(21) アンドリュー・ランバート「戦略家のための歴史」58頁。

(22) Julian Corbett, *Drake and the Tudor Navy with a History of the Rise of England as a Maritime Power*, (London: Longmans, 1898).

(23) Julian S. Corbett (ed.), *Papers Relating to the Navy during the Spanish War, 1585-1587*, (London: Navy Records Society, 1898).

(24) Julian S. Corbett, *The Successors of Drake*, (London: Longmans, 1900).

(25) 1907年、戦争課程は Royal Naval War College と正式に改称される。しかし1914年には再び Royal Naval College に統合された。

で講義を任される。海軍史家となったことに続く人生の重要な転機であり、これ以降、海軍との関わりが生涯続くことになる。このコースは高級士官を対象として1900年に設立されたもので、ヘンリー・メイ (Henry May) 大佐が責任者を務めていた。

講義のテーマは基本的に自由だったが、何か現代の戦闘にも活かせるような教訓について話してほしいというのが依頼内容であった。講師⁽²⁶⁾として招聘するにあたって、どうやらメイはコーベットのことを海軍史の研究者という程度の認識しか持っていなかったようで、彼の歴史書を読んだ形跡もなかった⁽²⁷⁾。しかし一連の講義を聞き終えた後ただちにメイは、コーベットを戦争課程の中核的スタッフとして扱うようになったのである。

1903年にコーベットは、ジョン・フィッシャー (John Fisher: 1841-1920) 提督と出会う。そのころコーベットは海軍の不効率な教育システムを批判する一連の記事⁽²⁸⁾を発表しており、雑誌編集者のヘンリー・ニューボルト (Henry Newbolt) が、海軍の教育改革に取り組んでいたフィッシャーと引き合わせたようである。当時フィッシャーは第二海軍卿

(Second Sea Lord) であり、翌年には海軍トップの第一海軍卿 (First Sea Lord: 1904-1910)⁽²⁹⁾に就任する実力者であった。

彼はドレッドノート級戦艦の生みの親として知られ (ただし実のところフィッシャーは、装甲を犠牲にして高速性能を優先した巡洋戦艦の導入にむしろ力を注いでいた)、旧態依然たる英海軍を近代的な戦う組織へと変貌させた功労者でもある。さらに第一海軍卿を退いた後も、第一次世界大戦の勃発を受けて、再び第一海軍卿 (1914-1915) に復帰した異色かつ異例の経歴の持ち主である⁽³⁰⁾。

コーベットはフィッシャーのアドバイザーとして緊密に連絡を取り合うようになり、これはフィッシャーが世を去るまで続いた。コーベットはまた、フィッシャーが行おうとする改革の広告宣伝塔や理論的支柱のような役割を果たすことになる。すなわち新聞や雑誌で彼の政策を支持する内容の記事をたびたび公表し、フィッシャーを大いに満足させたのである。一方、フィッシャーは海軍の内部資料や情報を惜しみなく提供するなど、コーベットの研究をサポートした。こうしてコーベットはフィッシャーという後ろ盾を背景に、

(26) コーベットが海軍大学校の教授であったとの記述をみかけることがあるが、これは誤りである。コーベットは海軍の教育研究活動に民間研究者としては異例なほど深く関わりあいを持ったが、身分的にはあくまで非常勤ないし客員の講師 (Lecturer) であった。

(27) Andrew Lambert, 'The Naval War Course, *Some Principles of Maritime Strategy and the Origins of the 'British Way in Warfare''*, in Keith Neilson and Greg Kennedy (eds.), *The British Way in Warfare: Power and the International System, 1856-1956: Essays in Honour of David French*, (Surrey: Ashgate, 2010), p. 225.

なお、この論文はコーベットに焦点を当てつつも、戦争課程そのものについて一次史料に基づきアプローチした優れた研究である。

(28) Julian Corbett, 'Education in the Navy I.', *The Monthly Review*, (March 1902), pp. 34-49; Julian Corbett, 'Education in the Navy II.', *The Monthly Review*, (April 1902), pp. 43-57; Julian Corbett, 'Education in the Navy III.', *The Monthly Review*, (September 1902), pp. 42-54.

(29) 旧日本海軍風にいえば軍令部総長にあたるポストである。現在の英海軍では、第一海軍卿兼海軍参謀長 (First Sea Lord and Chief of the Naval Staff) と呼ばれている。

(30) フィッシャーの生涯と業績については、以下の研究がまとまっており非常に参考になる。Andrew Lambert, *Admirals: The Naval Commanders Who Made Britain Great*, (London: Faber and Faber, 2008), Chapter 8, 'Radical Reform: John Fisher', pp. 289-333.

海軍省の非公式顧問のような地位を占めるようになる。

しかし海軍中枢と強力なコネクションを得た反面、コーベットの研究内容や主張の当否とはあまり関係なく、彼に対する批判や反発を引き起こすことにもなった。フィッシャーは権力志向が強く、尊大な性格ゆえ海軍内外に敵が多かった。彼ら批判派からコーベットはフィッシャーの取り巻き（‘Fishpond’ と揶揄されていた）とみなされたのである。実際のところコーベットは、必ずしもフィッシャーの政策や方針を全面的に支持していたわけではなかった。しかしフィッシャーの単なる操り人形に過ぎないと思われたことは、コーベットの戦略思想や研究成果が、死後、急速に忘れ去られてしまう一因ともなった。

1904年にコーベットは、『地中海における英国 (*England in the Mediterranean*)』⁽³¹⁾ を出版する。コーベットはこのなかで、英国が列強への道を歩み始めた17世紀における、陸軍作戦と海軍戦略の関係性を描き出した⁽³²⁾。全2巻のこの本は、戦争課程での講義と1903年に実施されたオックスフォード大学のフォード記念講義 (Ford Lectures)⁽³³⁾ をもとにしている。フォード記念講義とは、オックスフォード大学の内外から選ばれた一流の歴史家が、英国史に関わるテーマで一連の講義を担当する大変栄誉あるものであった。

同じ1904年には、戦争課程を運営し、みずからも教鞭をとっていたメイが他界している。後任は同課程の卒業生でもあるエドモンド・スレイド (Edmond Slade) 大佐であった。

メイ時代の戦争課程は資金もスタッフも十分ではなく、彼の突然の死は過労が原因だった可能性もあるが、フィッシャーの第一海軍卿就任に伴い、スレイドの下で戦争課程は人的にも資金面でも拡充される。

コーベットにとってスレイドは、海軍部内でもっとも親しい同僚かつ友人となった。陸海軍の緊密な連携を重視する点など戦略的な考え方も近く、二人はその後、協力して執筆作業を行うようになる。

海軍省の文書類に目を通すことができるようになったコーベットは、これらが戦略的思考の欠如した「ゴミ同然」のものとして強く感じ、1905年に直接フィッシャーにその不満を手紙で訴える⁽³⁴⁾。フィッシャーはただちにこの指摘に応じ、コーベットによる戦略関係の講義を増やし（これらの講義がのちの戦略関係の著作へと結実する）、さらに戦争課程を事実上の参謀機構として活用するようになった。

実際のところ、コーベットとスレイドはともに参謀部を正規に創設すべきと考えていたのであるが、フィッシャーは自分のコントロールが及ばないところで重要な決定がなされる可能性を極端に嫌ったのである⁽³⁵⁾。いずれにせよ、このような形でコーベットは最新情勢の分析、戦争計画および戦略の立案といった海軍政策の中核部分にも深く関与することになる。

ところで、戦争課程が参謀機構の代わりを務めるというのは、すこし奇妙に聞こえるかもしれない。これは戦争課程がいわゆる士官

(31) Julian S. Corbett, *England in the Mediterranean: A Study of the Rise and Influence of British Power within the Straits 1603-1713*, (London: Longmans, 1904).

(32) ピーター・スタンフォード「ドレッドノート時代におけるジュリアン・コルベット卿の業績」64頁

(33) 正式名称は、The James Ford Lectures in British History という。

(34) Donald Schurman, *Julian S. Corbett*, pp. 43-44.

(35) 結局、フィッシャーの第一海軍卿退任後に参謀部 (Admiralty War Staff) は海軍省内に設置されることになる。

学校ではなく、もっと階級の高い軍人のための再教育機関であったことから、可能となったものである。すなわち受講者は佐官級を中心としつつも、なかには将官すら含まれていた。その彼らに海軍情報部からの最新レポートを提供し、実践的なテーマで政策や戦略の立案を求め、検討させたわけである。

3. 海洋戦略思想家の誕生

戦争課程での教育活動を通じて戦略への関心と理解を深めたコーベットは、これまで通りに戦史書の出版や編纂を続けるのと並行して、ついに戦略論上の一連の研究成果を生み出すことになる。海洋戦略思想家としてのコーベットを理解する際、重要となるのは以下3種類の著作である。

第1は、その見だ目から『グリーン・パンフレット (The Green Pamphlet)』と呼ばれているもので、戦争課程の受講生に副読本として配布された小冊子である。まず1906年に『海軍史の講義で使用される戦略用語と定義 (Strategical Terms and Definitions used in Lectures on Naval History)』というタイトルで刊行され、次いで1909年にその増補改訂版である『戦略に関する覚書 (Notes on Strategy)』が出された⁽³⁶⁾。当時これらは機密扱いであり、一般の目に触れることはなかった。

コーベット第2の戦略研究上の業績は、1907年の「戦争計画：海戦の諸原則・第1部 (‘War Plans: Some Principles of Naval Warfare,

Part 1’)」である。このころフィッシャーが海軍省内に委員会を私的に設置し、ドイツとの戦争計画の立案や検討にあたらせていた。その序論にあたる部分の執筆が、フィッシャー肝いりでコーベットに委ねられたのである。この「戦争計画」も当然ながら機密であったが、フィッシャー関係の文書類を集め没後に海軍記録協会から出版された本に収録されている⁽³⁷⁾。

そして第3が一般向けに出版されたコーベット唯一の戦略書、『海洋戦略の諸原則 (Some Principles of Maritime Strategy)』である。1911年に公刊されたこの1冊の本だけで、コーベットは戦略家として歴史に名を遺したとすら言える。逆にこれがなければ、おそらくコーベットはあくまで海軍史研究者としてのみ捉えられていたことであろう。いずれにせよ、それまでの各種著作の中に断片的に示されていたコーベットの戦略思想が、体系的な形で展開されているのが本書である。

では、これらコーベットによる戦略関連の研究業績について、その概略を順に示したい。

最初に『グリーン・パンフレット』であるが、すでに触れたようにこれはあくまで講義用の副読本であり、中身としては専門用語の定義と簡単な説明が主で、それにやや詳しい注釈がついたレジユメを冊子としてまとめたような感じである。ただし、戦略に関係した専門用語を列挙しただけの単なる用語集というわけではなく、コーベットの戦略思想が色濃く反映された文書となっている。

(36) Julian S. Corbett, ‘Strategical Terms and Definitions used in Lectures on Naval History’, (November 1906); ‘Notes on Strategy’, (January 1909). この『グリーン・パンフレット』の旧版と新版は、以下の本にAppendixとして収録されている。

Julian S. Corbett, *Some Principles of Maritime Strategy*, With an Introduction and Notes by Eric J. Grove, (Annapolis: United States Naval Institute, 1998), pp. 307-325 and pp. 326-345.

(37) ‘War Plans: Some Principles of Naval Warfare, Part 1’, in Peter Kemp (ed.), *The Papers of Admiral Sir John Fisher*, (London: Navy Records Society, 1964), vol. 2, pp. 318-345.

すなわちこれを読めば、ある程度、コーベットの戦略的思考の骨子が理解できるのである。もちろん戦略上の主著たる『海洋戦略の諸原則』の方が内容も説明も充実しており、この本にしか書かれていないようなことも多いのは事実だが、コンパクトにまとまった『グリーン・パンフレット』は、コーベット戦略のいわば入門編として非常に有益である。『海洋戦略の諸原則』に関しては翻訳⁽³⁸⁾が出版されているが、『グリーン・パンフレット』にはそれがないのが残念でならない。日本におけるコーベット受容が遅れている一因とすら言えるかもしれない。

この『グリーン・パンフレット』、おそらく実質的にはスレイドとの共著であるか、少なくとも彼と緊密に協議を重ねつつ書き進められたものと考えられている。しかしそのスレイドは1907年に海軍情報部長 (Director of Naval Intelligence) へと転出する。コーベットの親しい友人であり、彼の戦略思想の良き理解者であったスレイドが戦争課程を離れたこともあり、その後任者らの影響のもと、1909年の改訂第2版では海軍内で物議をかもしそうな箇所が、抑え気味の口調で執筆されているとイギリスの著名な海軍史研究者エリック・グローヴ (Eric Grove) は指摘する⁽³⁹⁾。

ただこの点については、そのようなことはないと言っただけで否定する論者⁽⁴⁰⁾ もおり、いずれにせよ印象が関わることなので、なかなか客観的な判断は難しい。筆者自身が読み比べた限りにおいては、こまかなニュアンス

はさておき、第1版であれ第2版であれそこに記されているコーベットの根本思想に、何ら変化はないと考える。

1909年の第2版は内容・分量ともに拡充し、注釈が本文に組み込まれる形となっており、個々の用語や概念の説明が丁寧になっている。第1版が短編ゆえ簡潔で直截的な文体であったことから、もしかしたらこのような増補改訂によって、第2版は若干言い訳がましくなったかのような印象を一部読者に与えているのかもしれない。

いずれにせよ、仮にコーベットが意図的にその先鋭的な主張をトーンダウンさせていたとしても、そのことに意味はまったくなかったことになる。というのも『グリーン・パンフレット』は、のちに大きな批判を招くことになったからである。

ではその具体的内容は一体いかなるものか。この『グリーン・パンフレット』で展開されたコーベットの戦略思想には、2つの大きな特徴を指摘することができる。

第1は、クラウゼヴィッツの戦争論を思考枠組みとして受容し、海軍戦略への応用を試みている点である。コーベットは冒頭の海軍戦略に関する説明部分で、「戦争というものは政治的な駆け引きの一形態であり、わが方の目的を達成するために武力が導入されたときから始まる対外政策の延長である」⁽⁴¹⁾と明確に述べている。

このようなクラウゼヴィッツ的観点からすると、海軍戦略は独立したものではありません。

(38) ジュリアン・コーベット (高橋弘道訳) 『海洋戦略のいくつかの原則』 [高橋弘道編著 『戦略論体系⑧コーベット』 (芙蓉書房出版、2006年) 所収]。

(39) Eric Grove, 'Introduction', in Julian Corbett, *Some Principles of Maritime Strategy*, p. xxi. エリック・グローヴは『海洋戦略の諸原則』と2種類の『グリーン・パンフレット』を収録し、米海軍協会 (United States Naval Institute) から出版された上記の本に対し、かなり詳細な序文を寄せている。

(40) J. J. Widen, *Theorist of Maritime Strategy*, pp. 37-38.

(41) Julian Corbett, 'Strategical Terms and Definitions', p. 307.

ず、戦争術全体のなかで単に一部門を占めるに過ぎないことになる。海軍軍人は海戦ですべての決着がつくと単純に考えがちであるが、海軍戦略は最終的でも決定的でもないとして、国家戦略や陸軍戦略と密接に連携させる必要性をコーベットは説く。

第2の特徴は、艦隊決戦至上主義の否定である。コーベットの考えによれば、「制海権 (Command of the Sea)」には全面的なもの、局所的なもの、永続的なものと一時的なものがある。確かに全面的で永続的な制海権は、艦隊決戦で相手方を殲滅することでしか得られないかもしれない。しかし陸軍が海外遠征作戦を実施するために、海軍としては一時的で局所的な制海権を確保すれば十分なこともありうる。

すなわち通常、艦隊の主要な目標は敵艦隊の捕捉・撃滅にあるとされ、このことは一般論としてはもちろん正しいのだが、絶対というわけではないのである。敵艦隊をどこかに封じ込めておけば良いこともあるし、そもそも敵側が自己の劣勢を自覚して決戦をあくまで回避するかもしれない。

こうしてシーパワーの確立はそれ自体が目的なのではなく、真に重要なのは海上交通路を保持することであり、敵艦隊がこれを危うくする可能性がある限りにおいて、これを排除せねばならないということになる。

この第2の点は、後年コーベットに対する激しい批判を招くことになってしまう。つまり艦隊決戦の意義を少しでも損なうような記述は、海軍士官の士気や決心に重大な悪影響を及ぼすと懸念されたのである⁽⁴²⁾。実際のところコーベットは艦隊決戦の重要性を全否

定していたわけではないのだが、彼のニュアンスに富んだ表現と洗練された思考は、単純明快さを望む軍人に理解されなかったのである。

次に、コーベットによる1907年の論文「海戦の諸原則」は、バラード委員会が4か月の間、検討を重ねた成果文書「戦争計画」の一部である。この委員会はその名の通り、G・A・バラード (G. A. Ballard) 大佐を長とし、1906年11月に海軍省内に設置されたもので (実際にスタートしたのは翌12月)、委員の人选や文書の作成にはフィッシャー自身が深く関与したとのことである。委員長のバラード大佐は知的で優れた戦略思想家として尊敬されていた人物で、3名の士官が彼を補佐していた。とはいえこの委員会はいくまで私的なもので、海軍省にはまともな戦争計画がないとの批判をかかわすため、フィッシャーが創設したとされる。

この「海戦の諸原則」論文は、コーベットに関する先行研究でも紹介されることが比較的少ないので、「戦争計画」文書全体についても簡単に触れておきたい⁽⁴³⁾。計188頁からなる文書は、次頁の表のような構成となっている。

このように委員会自体が実際に起草したのは第3部であり、またコーベットの第1部「海戦の諸原則」も「戦争計画」のためにいわば書き下ろされたものであるが、第2部と第4部は既存のものを取り込んだだけであり、最後の第5部はアーサー・K・ウィルソン (Arthur K. Wilson) 提督による総括コメントというのが全体の成り立ちである。

そのなかでコーベットが担当した「海戦の

(42) Donald Schurman, *Julian S. Corbett*, pp. 55-56.

(43) Christopher Martin, 'The 1907 Naval War Plans and the Second Hague Peace Conference: A Case of Propaganda', *The Journal of Strategic Studies*, vol. 28, no. 5, (October 2005), pp. 833-856.

表：1907年「戦争計画」文書の概略

構成	表題	作者	備考
第1部	海戦の諸原則	コーベット	フィッシャーが執筆に協力
第2部	ドイツとの戦争に関する全般的所見	スレイド	1906年スレイド作成の「ドイツとの戦争」がもとに
第3部	戦争計画	バラード委員会	フィッシャーが監修
第4部	兵棋演習		戦争課程における兵棋演習を集めたもの
第5部	アーサー・K・ウィルソン提督による「戦争計画」への所見	ウィルソン	フィッシャーの求めに応じて1907年3月に出された所見

出所：Christopher Martin, 'The 1907 Naval War Plans and the Second Hague Peace Conference: A Case of Propaganda', *The Journal of Strategic Studies*, vol. 28, no. 5, (October 2005), pp. 833-856 をもとに筆者作成。

諸原則」に関しては、彼の単著というわけでは必ずしもなく、とくに同論文の最後の「平時の備え (Peace Preparations)」というセクションが、フィッシャーとの共著であったとされる。ただし他の部分は基本的にコーベットの手によるものと考えられる。

では肝心の中身についてであるが、この論文のかなりの部分は、艦隊編成のあるべき姿について割かれている。そして戦艦、巡洋艦、その他の小型艦艇などに関し、それぞれの役割や機能がかなり詳しく論じられており、これらは後年の『海洋戦略の諸原則』のなかにも取り入れられている。

しかしながら正直なところ、この種の議論は現代のわれわれにとって、あまり関心がわかない内容である。「海戦の諸原則」論文を詳しく取り上げる研究が、これまでそれほど存在してこなかった一因なのかもしれない。

ただし、「海戦の諸原則」はこの問題ばかりを論じているわけではなく、他の箇所ではいかにもコーベットらしい戦略思想が表れている。すなわちコーベットによると、陸戦においては領土の争奪が重要であるが、海戦で海を占領することなどできないので、制海権とは要するに交通路の確保に他ならないとし、広い海洋の絶対的な支配とみなすような考え方を否定する。

制海権の獲得は戦艦によって決するというのが当時の常識であったが、コーベットによれば、実際に交通路の維持と管制にあたるのは巡洋艦や小型艦艇の役割である。したがって仮に敵側に戦艦がまったくなくても、交通路を確保するためには巡洋艦や小型艦艇がいずれにせよ必要であるが、わが方があえて戦艦を保有する必要はなくなる。というのも戦艦だけでは数も速度も足らないので、制海権を保持できなくなってしまうからである。つまり敵側に戦艦があり、味方の巡洋艦や小型艦艇の行動を阻害しうるような場合にのみ、対抗上こちらも戦艦が必要ということになる。

こうして戦闘艦隊の主たる機能は敵艦隊の捕捉・撃滅にあるとされていたが、コーベットが考えるにこの見方は、完全な間違いとまでは言えないが必ずしも正確なものではなく、交通路の管制にあたる味方の巡洋艦や小型艦艇を支援し防衛することこそがもっとも重要な任務と主張する。

このように戦艦と巡洋艦の主従関係を逆転させ、当時広まっていた戦艦偏重思想と艦隊決戦至上主義を否定するのは、コーベットの海洋戦略のまさに核心的部分のひとつである。

最後の『海洋戦略の諸原則』においては、これまで部分的に示されてきた戦略思想が集大成されている。戦略を主題としたコーベッ

ト唯一の単著⁽⁴⁴⁾ということもあり、本書において初めて示されるような主張や見解も数多く見られるが、ここでは中心的なテーマに絞って概要のみ手短かに紹介することにしたい⁽⁴⁵⁾。

第1の点は、クラウゼヴィッツの戦争論がさらに徹底して取り込まれ、いわば消化・吸収のうえ、コーベットの独自の体系的な海洋戦略が展開されるようになってきていることである。

当時、ナポレオン戦争の教訓もあり、軍事作戦の立案と遂行にあたっては攻勢をあくまで追求し、敵軍を粉砕することにこそ至上の価値があるとされた。このような殲滅戦ドクトリンの流布にはクラウゼヴィッツの誤読、通俗的で皮相な理解も大いに影響していたと考えられるが、攻撃の自己目的化という弊害をもたらした。しかしこれでは国家目標を追求する手段としての軍事力という、クラウゼヴィッツの真意からはかけ離れてしまう結果となる。

これに対してコーベットは、限定的な政治目的を限定された手段で達成する制限戦争論の立場をとり、他国と地続きで接していない海洋国家にはそれが可能であると力説した。総力戦の思想が幅をきかせていた時代にあつて、コーベットは制限戦争論をあくまで展開した数少ない戦略家のひとりであったと言える。

第2のポイントは、陸海軍協働の重視と海

軍偏重思想の否定である。コーベットは「戦争が海軍の行動だけで決まることほとんどありえない」⁽⁴⁶⁾と明言したうえで、現在でもしばしば引用される次のような有名な言葉を残している。

人間が暮らしているのは陸上であつて海上ではないので、交戦中の国家間で重大な問題はつねに——ごくまれな例外を除いて——陸軍が敵国の領土や国民生活に対してなしうることによって、あるいは艦隊が存在することで陸軍がなしうることへの恐怖によって、決定されてきた⁽⁴⁷⁾。

このようにコーベットは、海軍力の限界を率直に認める非常に珍しいタイプの海洋戦略思想家であった。もちろん海軍や艦隊が不要、あるいは陸軍よりも重要性が低いなどという意味ではまったくくない。コーベットが制海権と海上交通路の確保をなによりも重視していたことから分かるように、シーパワーへの過剰な期待をいさめるのがあくまでもその目的であり、彼の意図は海軍にできることとできないことをきちんと峻別することにあつた。こうして軍事的成功のためには、陸海軍の相互依存と連携強化が不可欠であることを強く主張したのである。

(44) コーベットは校正刷りをスライドに見せようとしたが、その願いはかなわずそのまま出版されることになった。というのも当時、フィッシャーとの関係をこじらしたスライドは、海軍省から事実上、追い出されるような形で、東インド艦隊 (East Indies Station) の司令官となっていたからである。

Eric Grove, 'Introduction', in Julian Corbett, *Some Principles of Maritime Strategy*, p. xxv.

(45) コーベットの『海洋戦略の諸原則』の解説としては、同書の翻訳者である高橋弘道によるものが、よくまとまっていて参考になる。

高橋弘道「解題：評価されなかった学者戦略家コーベット」高橋弘道編著『戦略論体系⑧コーベット』284-317頁。

(46) Julian Corbett, *Some Principles of Maritime Strategy*, p. 15 [ジュリアン・コーベットの (高橋弘道訳) 『海洋戦略のいくつかの原則』21頁]。

(47) Julian Corbett, *Some Principles of Maritime Strategy*, p. 16 [ジュリアン・コーベットの (高橋弘道訳) 『海洋戦略のいくつかの原則』21頁]。

この『海洋戦略の諸原則』は1911年の出版当時、英米両国で概して好意的な評価を受けた⁽⁴⁸⁾。ロンドンの『タイムズ (Times)』紙は書評のなかで、海戦の諸原則に関して、きわめて一貫性があり説得力ある議論をしていると記している。

『パル・マル・ガゼット (Pall Mall Gazette)』紙は、コーベットがマハンよりも見事に戦略と歴史を融合させていると論じ、海上防衛に関する書としては、市民にも海軍軍人にもひとしく価値があるとしている。

さらに『スタンダード (Standard)』紙にいたっては、「スーパー・マハン」の誕生とまで称賛し、マハンが理論から出発して、みずからの主張に適合する都合の良い史実ばかりを集めたのに対して、コーベットのアプローチは真逆であり、そのような独断主義を免れていると鋭く指摘している。

一方マハンの母国アメリカでも、『ボストン・ヘラルド (Boston Herald)』紙によると、コーベットの冷静で学術的なスタイルは、一般の読者にとっては難しすぎる問題を理解する助けになると評価されている。

また『ニューヨーク・イブニング・ポスト (New York Evening Post)』紙は、マハンより議論が明瞭かつ簡潔で、論理的であると述べている。

しかしながらその一方で、『海洋戦略の諸原則』に対する強い批判もやはり存在した。考えてみれば、コーベットの戦略思想には制限戦争論の主張や艦隊決戦主義と海軍偏重思想の否定といった特徴があり、当時、海軍軍

人の間に広まっていた常識や信念とは大きなずれがあったことから、彼に対する厳しい意見が存在したとしても当然かもしれない。

ジャーナリスト出身で当時オックスフォード大学教授(軍事史)のスペンサー・ウィルキンソン (Spenser Wilkinson) は以前からの反コーベット派であり、典型的な攻勢至上主義者として『グリーン・パンフレット』を戦略的に誤ったドクトリンであると公然と批判していた。

『海洋戦略の諸原則』についても、海軍軍人がこれを読むと海軍へ悪影響が及んでしまうと手厳しく非難している。ウィルキンソンによれば、海戦は陸戦よりも決定的な結果をもたらすものであり、また国家間の戦争はその究極までエスカレートする傾向があるので制限は不可能であるとし、コーベットの混乱を招くような書より、マハンを読む方がはるかに推奨されると断言した⁽⁴⁹⁾。

これよりもさらに辛辣で、かつ偏見に満ちた批判の声が、英海軍の現役軍人からもあがっていた。おそらく戦争課程の受講生であったと想像される海軍大佐 (Captain R.N.)⁽⁵⁰⁾ は匿名の投書のなかで、コーベットの本が彼のキャリアを通じて最大の過ちであったと切り捨てる。アマチュアが海軍問題に首を突っ込んできたものの、海戦に関する権威ある書物としては到底認められないと述べ、シビリアンのコーベットは海軍士官と相談しつつ執筆すべきであったと大佐は結論づけている⁽⁵¹⁾。

要するに、軍務経験もないような素人の学者にいったい海軍戦略のなにが分かるのか、

(48) 当時の評価に関しては、Eric Grove, 'Introduction', in Julian Corbett, *Some Principles of Maritime Strategy*, pp. xxxvi-xli; J. J. Widen, *Theorist of Maritime Strategy*, pp. 41-43が詳しい。

(49) Spenser Wilkinson, 'Strategy in the Navy', *The Morning Post*, (13 August 1909); Spenser Wilkinson, 'Strategy at Sea', *The Morning Post*, (19 February 1912).

(50) R.N. は Royal Navy の略、すなわち英海軍を意味する。

(51) *Naval and Military Record*, (1911), p. 821.

とでも言いたげな排他的でエリート主義的態度であるが、当時このように考えた海軍軍人はおそらく彼だけではなかったであろう。

このような批判を気にしてのことと思われるが、コーベットは1912年の時点で出版社に対し、スレイドを共著者とした第2版を出すことが可能かどうか問い合わせをしている⁽⁵²⁾。このことが自分の本に対する偏見を払拭するのに有効と考えたのかもしれない。しかしその時点では出版社にまだかなりの残部があり、この案は実現しなかった。

1919年になってついに第2版が出されることになったが、このときコーベットは第一次世界大戦時の海戦に関して公式戦史を執筆するよう海軍省から依頼されており、多忙をきわめていた。その結果、第2版はなんらの加筆や訂正もされることなく刊行された。

『海洋戦略の諸原則』が結局のところ修正されることなく、元のままで後世に伝えられることになったのは、戦略を研究するわれわれからすると非常に残念である。もちろん改訂されていたとしても、コーベットがどのような変更を施したかについては想像するほかない。ただ、コーベット唯一の戦略書は内容的にすばらしいものを含んでいるにもかかわらず、文章が非常に読みにくく将来に禍根を残す形となってしまった。

この本は、戦史研究と戦略論が有機的に結合した傑作、また法律家出身らしく論理的な明晰性を備えているなどと称賛されることが多いが、正直なところ読者はあまりそう感じないのではなかろうか。このような評は、コーベットの原文をはたして読んだのだろうか

と、個人的には少々首をひねってしまう。

戦略書としては史実が非常に豊富なことはたしかであるが、話があちこちに飛び、歴史的経緯の説明に必要以上にのめり込んで、いったいどのような戦略的主張を論証したいのか、よくわからなくなることがしばしばである。要するに主張の骨格や全体の構造がかなりつかみにくい⁽⁵³⁾。既存の文章をつなぎ合わせて、拙速に書かれた感は否めないのである。コーベットを肯定的に評価する研究者の間でも、この本の文末に結論や各部の最後にまとめがあれば、ずいぶんと違ったであろうと指摘されており、筆者も同感である⁽⁵⁴⁾。

これら戦略関係の著作を次々と生み出していった期間、実のところコーベットは戦史書の出版も続けていた。それが1907年の『七年戦争における英国 (*England in the Seven Year's War*)』⁽⁵⁵⁾であり、タイミング的には、初版の『グリーン・パンフレット』の翌年、「戦争計画」と同年、そして『海洋戦略の諸原則』の4年前ということになる。そのためか純粋に戦史上の研究書というよりも、コーベットの戦略思想が色濃く投影された内容となっている。とりわけ指摘しておくべき点は、前年の『グリーン・パンフレット』ですでに示されていたクラウゼヴィッツの影響が、ここでもやはり強く見て取れることである。

コーベットは「艦隊唯一の機能は、海上での戦闘に勝利すること」という考えに異を唱え、艦隊決戦それ自体が目的ではなく、戦争に勝利するという目標達成のための手段でしかないことを強調する⁽⁵⁶⁾。コーベットによれば、艦隊の主要な機能は以下の3つで

(52) このころスレイドは、東インド艦隊への事実上の追放を解かれ、新設された海軍省の参謀部に勤務していた。

(53) 高橋弘道による翻訳では、注釈の形で文章の骨格が要所要所で整理しており、理解の助けとなる。

(54) J. J. Widen, *Theorist of Maritime Strategy*, pp. 42-43.

(55) Julian S. Corbett, *England in the Seven Years' War: A Study in Combined Strategy*, (London: Longmans, 1907).

(56) Julian Corbett, *England in the Seven Years' War*, vol. 1, p. 3.

ある⁽⁵⁷⁾。

- ①外交努力の支援または妨害
- ②通商の保護または破壊
- ③陸上の軍事作戦の促進または阻害

このように自国の外交政策や陸上作戦を支援し、通商保護に従事する一方、敵側のそれは妨害することを艦隊の役割としており、海軍の使命を艦隊戦での勝利へと矮小化や単純化せず、国家戦略という広い文脈のなかで位置づける姿勢はコーベットの徹底している。このことは彼の次の言葉からもうかがえる。

大きな帝国が関わる場合、戦争というものは海上で決着がつくものではない。そのような戦争は、艦隊だけで遂行することはできないのである。陸上作戦が騎兵、歩兵、砲兵の協力と調整を必要とするように、また海上作戦が戦艦、巡洋艦、小型艦艇の協力と調整を必要とするように、大規模戦争は海軍力、陸軍力、外交力をきちんと組み合わせることによって遂行される⁽⁵⁸⁾。

さらにもう1冊、コーベットが戦略研究にあたっていた時期に出版された戦史書が、1910年の『トラファルガーの海戦 (*The Campaign of Trafalgar*)』⁽⁵⁹⁾である。こちらは『海洋戦略の諸原則』の前年にあたる。英海軍史上最大の英雄とでも称すべきネルソン提督に、満を持してついに取り組んだわけである。

本書におけるコーベットの主張の骨子は、ナポレオンを打倒するのにシーパワー単独では不十分だったこと、そして陸軍との協力的な

くして海軍は決定的で効果的な戦争手段とはなりえないことであった。たしかにトラファルガーの海戦（1805年）での勝利にもかかわらず、ナポレオンを退位に追い込むまで以後10年近くの歳月がかかっているのは、否定しえない事実である。さらにこの本のなかでコーベットは、ネルソンの戦術⁽⁶⁰⁾を「狂った垂直攻撃」とまで評し、リスクがあまりにも大きすぎたとして彼を厳しく糾弾した。

このようなコーベットの主張は、それまでのように論壇や海軍内で批判を招くだけでは済まず、かなりの物議をかますことになってしまう。すなわち、ネルソンを崇拜したコーベットに批判的な一派の要求によって、海軍省に調査のための委員会が設置されるという異例の事態となったのである。この騒動は1913年まで続き、最終的にはコーベットの主張に問題はないとの判断が下された⁽⁶¹⁾。しかしながらこの一件は、彼の思想が当時の専門家や海軍の保守層からすると、いかに先鋭的で挑戦的なものであったかをよく表している。

その一方、チャーチルはコーベットをあくまで評価していたようで、1914年3月、当時の海相（1911-1915）として帝国防衛委員会（Committee of Imperial Defence）において、以下のような言葉を残している。

海軍に関する歴史研究は極めて不十分である。回想録や一般書のたぐいは多いが、海軍士官にとって有益な、一次史料の批判的分析に基づく過去の海軍作戦に関して信頼できる著作は——ジュリアン・コーベット氏の『七年戦争におけるイング

(57) Julian Corbett, *England in the Seven Years' War*, vol. 1, p. 6.

(58) Julian Corbett, *England in the Seven Years' War*, vol. 1, p. 7.

(59) Julian S. Corbett, *The Campaign of Trafalgar*, (London: Longmans, 1910).

(60) いわゆる「ネルソン・タッチ (Nelson Touch)」のことである。

(61) Donald Schurman, *Julian S. Corbett*, pp. 113-130.

ランド』と『トラファルガー海戦』の二冊を例外として——存在しない⁽⁶²⁾。

4. 公式戦史の執筆

コーベットによる普通の意味での戦史書や研究書の出版は、1910年の『トラファルガーの海戦』と1911年の『海洋戦略の諸原則』をもって、事実上最後となった。以降は公式戦史の執筆に、残る人生を捧げたのである。

1911年からコーベットが執筆していたのは、日露戦争に関する公式戦史である。海軍省の情報部門から正規に委嘱を受け、スレイドと協議しつつ書き進められた。

英海軍は旧日本海軍の育成に長年協力してきた歴史的経緯もあり、いわば「弟子」の戦争である日露戦争に多大な関心を寄せていた。日英同盟の存在もあり日本側からは機密情報がかなり提供され、コーベットは執筆にあたってこれらの資料も無制限に閲覧が許された。

その結果、『日露戦争における海洋作戦 1904年-1905年 (*Maritime Operations in the Russo-Japanese War, 1904-1905*)』の第1巻⁽⁶³⁾が1914年に完成し、翌年には第2巻⁽⁶⁴⁾が仕上がったものの、これらの戦史は機密指定を

受けてしまい、部内用にごく少数印刷されただけで、民間の読者はもちろんのこと、退役軍人にさえ非公開となった⁽⁶⁵⁾。一般向けに広く公刊されたのは、ようやく1994年になってからの話である⁽⁶⁶⁾。

1914年7月に第一次世界大戦勃発すると、帝国防衛委員会によってコーベットは公的戦史家に任命された。これにはスレイドの強い働きかけがあったとされる。戦争の過程を克明に記録し公式戦史を執筆するという本来の役割のみならず、戦略について協議できメモランダムも起草できるコーベットを手近に置いておくことが、真の狙いだったようである。

こうして機密文書へのアクセスを許されたコーベットは、戦時日誌と公式戦史の執筆はもちろんのこと、フィッシャー第一海軍卿やチャーチル海相、アスキス首相らに対してメモランダムを送り、さらにはジョン・ジェリコー (John Jellicoe) 提督がグラント・フリート (大艦隊)⁽⁶⁷⁾の司令長官に就任するにあたって、彼に対する指示書までも起草したとされる⁽⁶⁸⁾。

このような国家への貢献を称え、1917年にはコーベットに「サー (Sir)」の称号が授与された。これにはフィッシャーやチャーチルらの推薦があったとのことである⁽⁶⁹⁾。

一方、膨大な長さの公式戦史の執筆は、コ

(62) アンドリュー・ランバート「戦略家のための歴史」68頁。

(63) Julian S. Corbett, *Maritime Operations in the Russo-Japanese War, 1904-1905*, (London: Admiralty War Staff, Intelligence Division, 1914), vol. 1.

(64) Julian S. Corbett, *Maritime Operations in the Russo-Japanese War, 1904-1905*, (London: Admiralty War Staff, Intelligence Division, 1915), vol. 2.

(65) Donald Schurman, *Julian S. Corbett*, p. 144.

(66) Julian S. Corbett, *Maritime Operations in the Russo-Japanese War, 1904-1905*, (Annapolis: Naval Institute Press, 1994).

(67) 英海軍の主力艦隊のこと。以前は「本国艦隊 (Home Fleet)」と呼ばれていた。旧日本海軍が連合艦隊の略称として使用したGFは、このグラント・フリート (Grand Fleet) に由来するとされる。

(68) J. J. Widen, *Theorist of Maritime Strategy*, p. 19.

(69) Donald Schurman, *Julian S. Corbett*, p. 172.

ーベットの健康を蝕んでいく。『第一次世界大戦公式戦史：海軍作戦（*Official History of the Great War: Naval Operations*）』の第1巻⁽⁷⁰⁾は1920年、第2巻⁽⁷¹⁾は1921年に出版され、第3巻を脱稿した直後の1922年9月21日、心臓発作でコーベットの世を去る。第3巻⁽⁷²⁾は死後の1923年に出版され、『海軍作戦』シリーズの残る第4巻と第5巻の執筆は、ニューボルトが引き継ぎ完成させた⁽⁷³⁾。

コーベットが晩年に取り組んだこれらの公式戦史は、以前の戦史書のように彼個人の戦略思想を体現したものとは言いがたく、ある種のチームワークの所産ではあるが、帆船時代の海戦を主として扱ってきたコーベットが近代戦についても著作を残したという意味で、現代の戦史研究者からすれば貴重な存在なのかもしれない。

おわりに

これまでコーベットの生涯と業績について振り返ってきた。彼は海軍史の世界にかなり遅れて入ってきたものの、それを挽回するかのようによい多作な研究者人生をおくり、本稿で取り上げた著書類以外にも、新聞や雑誌への寄稿、共著での執筆、そして史料の編纂や海軍省内部文書など、挙げだしたらきりが無い⁽⁷⁴⁾。

すでに述べたように、コーベットには軍務経験がまったくなく、また歴史研究に関する学位も持たず、さらに言うところ正規の教授職に

は生涯つかなかった。要するに軍事の分野でもアカデミズムの世界でも、本来なら彼はアウトサイダーであった。しかしながらコーベットの研究内容が高く評価されたこともあり、海軍中枢との強力なコネクションに恵まれ、戦争課程での教育活動や公的戦史家としての役割を通じて、英海軍の実質的な顧問のような存在であり続けた。単なる民間の海軍史家という枠に収まることなく、学者としては異例なほど成功を手にしたと言えるであろう。

このような生前の名声とは裏腹に、没後、コーベットの著作がかえりみられることはなくなってしまう。イギリス本国を含め、世界の海軍関係者や研究者が海軍戦略を学ぶ際に、あるいは海戦史理解の指針とするために、参照するのはマハンの著書であり思想であった。そしてこのような状況は、現在でも基本的に変わりはない。

コーベットが短期間で忘れ去られた理由として考えられるのは、やはり彼の戦略思想が当時としては受け入れがたい内容であったこと、フィッシャー派とみなされ研究に偏見をもたれてしまったこと、さらには戦史上の業績がなじみの薄い帆船時代のものがほとんどで、一方、戦略分野の著作が1冊しかないことも関係しているのかもしれない。

コーベットの研究の足跡をたどったとき、比重がかなり戦史寄りであったのは事実である。読みやすいとは言いがたい戦略書を出版したあとも、改訂や追補は結局なされず、ま

(70) Sir Julian S. Corbett, *Official History of the Great War: Naval Operations*, (London: Longmans, 1920), vol. 1.

(71) Sir Julian S. Corbett, *Official History of the Great War: Naval Operations*, (London: Longmans, 1921), vol. 2.

(72) Sir Julian S. Corbett, *Official History of the Great War: Naval Operations*, (London: Longmans, 1923), vol. 3.

(73) ピーター・スタンフォード「ドレッドノート時代におけるジュリアン・コルベット卿の業績」75頁。

(74) コーベットの著作一覧は、John B. Hattendorf, 'Appendix A: A Bibliography of the Works of Sir Julian S. Corbett', in James Goldrick and John B. Hattendorf (eds.), *Mahan Is Not Enough: The Proceedings of a Conference on the Works of Sir Julian Corbett and Admiral Sir Herbert Richmond*, (Newport: Naval War College Press, 1993), pp. 295-309.

た戦略関係の新作が書かれることもなく、彼は戦史の世界へと戻っていった。戦略研究という観点からすると、非常に残念である。

ただし、コーベットの戦史は単なる歴史的記述に終始したものではなく、彼の戦略思想を強く反映したものとなっている。ロンドン大学キングス・カレッジ教授（海軍史）のアンドリュー・ランバート（Andrew Lambert）は、コーベットのことを念頭に置きつつ以下のように主張する。

歴史と戦略の区別は、何を研究するかではなく、どう研究するかによって決定される。特定の戦争や軍事作戦において何が起こったかを理解しようとするならば、われわれは歴史家として振る舞っている。他方、これらの現象が将来の選択にどのような教訓を与えるかを知ろうとするならば、われわれは戦略家として振る舞うことになる⁽⁷⁵⁾。

このような観点からすると、コーベットは研究者としての生涯を通じて、優れた戦史家でありかつ戦略家であったと考える。

第二次世界大戦後、コーベットの再評価が徐々に進むようにはなってきた。しかしながら彼の戦略思想が専門家や実務者の間で十分な認知を得ているとはとても言えず、コーベットに関する記述がほとんどない戦略論の概説書もいまだ珍しくはない。

コーベットを好意的に取り上げている研究者のなかでも、評価の中身はかなり分かっているのが実態である。独創的で稀有な戦略家と非常に高く称賛する声⁽⁷⁶⁾もあれば、一流とまでは言えないが優れた戦略家と考える者⁽⁷⁷⁾もいる。さらに戦史家としては後世に名を残すような重要な存在であるものの、コーベットを戦略家とみなすことはそもそもできず、彼の戦略書に時代を超えた価値などないとの見方⁽⁷⁸⁾すらある。コーベットに対する学術的な評価が定まったとは言いがたい。

こうして戦略家としてのコーベットを正当に評価するためには、彼に関する先行研究を詳しく検証したうえで、コーベットの海洋戦略思想の内容そのものを精査することが当然必要となってくる。この点については、筆者の次なる課題としておきたい。

(75) アンドリュー・ランバート「戦略家のための歴史」57頁。

(76) J. J. Widen, *Theorist of Maritime Strategy*, pp. 58-59.

(77) Michael I. Handel, 'Corbett, Clausewitz, and Sun Tzu', *Naval War College Review*, vol. 53, no. 4, (Autumn 2000), p. 121.

(78) 'Discussion of the Papers Written by Professor Donald Schurman, Dr. Barry Hunt, and Commander James Goldrick', in Goldrick and Hattendorf (eds.), *Mahan Is Not Enough*, pp. 112-113.

